官版

語彙

卷十三

ホ 2
4706
13

あをのこぢ

紅葉せべき木のめまだ青きをいふ 春雨抄

あをとりこぢ、あげりあふ青きもこぢの下

さぢを暑さに蟬の聲ゆ

ゆづりぬ

あをやぎ

あをい青あり やうの形狀をいふ 類名 碧カヘヤ

青熒カヘヤ 源氏 きりうけぎつ物ゆいしとあを

やうあるうづゝのこゝちよげふをひゝもるゆ 和泉式部日記 はりひぢをう人の

草のあをやうあるもこゝふ人はめゝぐめぬをあをれよあげむるわどゆ

あをやぎ。あをやぎ

柳の色の青き故ゆいふ 万五 うめの花さを

たるもの阿乎夜疑遠ろゝふあゝあそび

らゝさゆ 古今 春上 青柳のいとよりかけてうぐひす

さだまて花のやどろびふける

衣部

元

善きをいふ 記上 亦使何神之吉 天智紀 奈

尓能都底舉騰多拖尼之曳雞武

元

上條よりの出て能きる意あり用言小冠ら

せてのふ 万十 ひこぼゝの河瀬をわたるさ袋

ぶ袋の得行てはてんかハぼゝわもほゆ 伊 をんるのえりまゝのりけるを

古今 戀三 おもへども人めづゝそれ高けれバかゝてゝこゝろのゝえこそわてら

ね 宇 俊蔭 とゝゝうげ心ふちゝびて

こゝろふるに元せぬこゝとゝあゝ

元

兄をいふ 記上 僕兄兄宇迦斯 雄畧紀 兄君弟

君 又 兄媛弟媛

元

胞衣をいふ 神代紀上 以淤路洲爲胞生大日

本豊秋津洲 景行紀 一日同胞而雙生

元

草木の枝をいふ 万二 磐白の濱松の枝を引結

びまさきくあゝばまたかへりこん

元

手足をいふ 雄畧紀 張夫婦四支於木

門 ホ 2
號 4706
冊数 13

明治十七年七月

語彙

衣之部

文部省編輯局

門 ホ 4
號 2402
冊数 13

語彙卷十三

衣部

元

善きをいふ 記上 亦使何神之吉 天智紀 奈小能都底舉騰多拖尼之曳雜武

元

上條よりも出て能きる意あり用言ハ冠らせてのふ 万十 ひてぼ〜の河瀬をわたるさ筏ぶ袴の得行てはてんかハぼ〜 古今戀三 おもへども人めづゝこそ高けれ おもほゆ 伊 をんなのえりまゞ〜のりけるを 和字 後撰 とゝ〜ゝげ心ふたごゝひて こゝろふるに元せぬこゝとゝあ〜

元

兄をいふ 記上 僕兄兄宇迦斯 雄畧紀 兄君 紀 君又兄嬢紀 嬢

元

胞衣をいふ 神代紀上 以淤路洲爲胞生大日本豊秋津洲 景行紀 一日同胞而雙生

元

草木の枝をいふ 万三 磐白の濱松の枝を引結びまさきくあ〜ぐまさかへりこん

元

手足をいふ 雄畧紀 張夫婦四支於木

え

器の把る所をいふ 内匠式 大笠柄二枝 六帖三 をの〜えをくちあバ又ルさぐの屬ゝうき世の中ふのくちびるものな

え

木名、高者三四丈ホ至る葉楕ゆ〜て先尖り葉ハ先ホ鋸齒あり枝間ホ互生も夏初淡緑の花を開き豆大の實を結ぶ生緑熟もれバ黑褐味甘〜○朴 万十六 吾門の榎實もり もむ百千鳥ちどりゝ来れど君ぞきまさぬ 和 榎和名

え

草名、苗葉花實並ホ紫蘇ホ同ド 只葉色青く花白〜植作りて其子の油をとり雨衣雨傘ホ塗るものあり 和 荏和名

え

入江をいふ 記下 久佐迦延能伊理延能波知須 六帖三 湊いりハ浪さわぐ〜〜あ〜まよふえふ志ハ人戔思ふ〜ら〜あれ 伊 こもり江ホ思ふ心をいのでゝも舟さぐさをのさ〜て志る〜ぐき

え

うるの體言 万三 われハもやもやまこと〜えこもり皆人の得難ホまこと〜ふやはこと〜えこもり

え

纓の音あり冠の巾子より後方へ垂るゝもハをいふ立えい垂えい巻纓細纓等の目

え

あり 西宮三 加茂祭警固衛府公卿巻纓着緌云々 唐物語 御手をさ〜やりて此男のうらぶりのえいをとりて

えい 音

永の音なり永錢ホ同ド○永榮詠等の字音古来延の音ホ唱来れり韻書ホ據て怪〜むべ〜らず

えい

力を用ある時の聲あり 盛衰六 此程風氣有て不入見參と云へ曳とて出合れば

えいの 音

詠哥の音、歌よむ歳いふ 三言抄 抑詠歌ホ哥言たゞ言といふたりめいゝ成を可申ぞや

えいのむ 音

天皇の御感を申奉る叡感の音あり 太平三 時刻うつさびはせ參る條叡感淺〜ぐる處也

えいぐわ 音

榮華の音あり 盛衰世三 志よせん一門えいぐゑつきてこゝやあよあんどせば

えいざんのこだこ 俗

草名、酢漿の一種あり葉大ゆ〜て一寸餘肥さるゝ二寸餘葉末ホ尖あり春月白花を開く大さ七八分又淡紅あるあり○白花酢漿草

えいざんごけ 俗

草名、地柏ホ同ド

えいざんすゝれ　草名、胡堇草ハ同じ

えいざんぶんまく　俗　草名、蒼葱ハ同じ

えいざんはぐま　俗　草名、鬼督郵の一種深山ハ生じ一根一莖長三四寸葉ハ草棉の如く粗く分れ六七莖對生し中心より莖茎抽き花茎開く車葉の はぐまの如し但微くハ

えいざんびる　俗　草名、蒼葱ハ同じ

えいざんゆり　俗　草名、蕎麥葉貝母ハ同じ

えいぢやく　音　尊き位をいふ 今昔二 東の方より榮爵尋て買いんと思ひて京ハ上りそる者ありそり

えいぢる　音　詩哥を吟ぜるをいふ又作るをもいふ 今昔廿四 緣ハ居並て月を興じて詩句を詠じけるに 無名抄 野中ハ哥の上の句を詠ぜる聲あり 詠哥大概 於古人歌多以其同詞詠之 太平八 いのるとも神やそうけんぐをのゝ〳〵そらゝ川のふのき思をとゝえいぜさせたまふ

えいぢる　ゼジズズルズレ

えいぜん　音　永樂錢の畧あり中古永樂錢一貫文以て金一兩ハ換しより起りて金銀の會計ハ猶此目を用ゐ来れり

えいらん　音　天皇の御覽をいふ 平家六 もゝぢの山と名付てひるもなほえいらんあるに 天皇の思し〳〵めしをいふ 太平二 常ハ叡慮をめぐらされしのども

えいりよ　音　魚名海鷂魚ハ同じ

えう　陸前仙臺　俗　要の音あり要用をいふ 伊 その男身を えうあき物ハ思ひあつて 今昔廿五 十月許ハ衣の要有けれバ

えう〳〵　音　要用ある事茂いふ 今昔廿五 三四月許過て要事有て貞道東國の方ハ行ハ〻

えうずる　音　ゼジズズルズレ　要の音ハて求れをいふ 宇俊蔭 女これをとりてもちて えう〳〵給ふ 所々よもていきてお

えゝ

驚嘆の聲

醜惡汚穢の事物を見聞て惡ミ疎む聲あり 紀上 疊々志夜胡志夜此者伊碁能布曾○又俗ホ

えゝう 音

榮花ホ同ド又俗ホ轉ジテ驕奢をいふ 慶節 榮耀 平他字類抄榮耀サカエヒカルコト

えゝの 音

垣下ホ同ヽ 源白宮 北むきホむくてえゝのミさぶち上達部の御座あり

えゝのち

心得ゴロあるをいふ 枕三 なんでふことなき人のさぐろまえがちまて物いゝういひたる

えゝのばゝ

小兒腹痛の病戎いふ 和 瘖衣賀波良

えゝもそい 音

驛遞の音、うまつぎをいふ

えゝれい 音

驛馬戎出ハ為め公の驗とゝして賜る鈴あり 公式 親王及一位驛鈴十刻

えきれい 音

疫癘の音 後記十三 壬辰勅如聞疫癘之時民庶相憚不通水火存心救療何有死亡

えこ 音

依怙の音、理ホ從ヒズ私まるをいふ 庭訓 敢以不可存自由依怙

えこひいき 俗

依怙ホ同ジ

えざけ

魚名、鯢ホ同ジ 和 鯢云々 云江鮭今按本文未詳

えさせる セスズルスレ、

他ホ物を與ヘ又他の我ホ與ふるをもいふ又轉ジて敬語ホもいへり 字拾七 こちのくよより得させ給へる馬あり云々皮もぎて つゝひ侍らん えさせ給へ 其ときゝへゝ えさせ給へ

えゝむる メムムルスレ、

他の我ホ物を得さするをいふ 記上 乞欲得水 万廿 足引の山行ゝゞ山人の我ホ依志米之山づとぞこれ

えせ

事物の卑ゝきをいふ又其物ホ似て全ゝゝぬをいふあり 枕 昔も えせ ものもミあすきをこの うこそありそれ 又三 えせぐるまどもうゝのけて 今昔廿七 但ゝえせこそのふもそ候めれ其故ハ實ハ鬼神あゝぶ已ゞの名をあそ呼べきホ 無名抄上 えせうたよみの秀句ホハ多くたゝぬこと出くるぞうゝ

えせび 周防 俗

木名、梭木をいふ

えぞ

ぜゞ秋のよれ月 新古雜下 みちのくのいもせの山のいもぜ

えゝゞの轉まて北海道の古稱あり 夫十三 こきつふ

えぞぎく 俗

草名子を種て生ひ葉雞兒腸ふ似て粗大光あり秋初莖を抽て花を開く大二寸菊花の如くふゝて

心ふ筒辨攢る紫紅白の三種あり

又秋月種る者ゝ夏初花を開く

えぞすゝれ 俗

草名紫花地丁の一種ふゝて葉ふ五岐深齒あり夏後變ゝて兩岐ゝなる春時花を開く形亦すゝれふ同ゝて大あり只其莖兩枝を對ゝ分つを異ゝふ○胡堇草

えぞあゝき 俗

北海道より來ふ一種の錦織紋種々あり然れとも紺地抓玉の龍を織れるもの多ゝ五爪の龍を最ゝ三爪四爪の者

えぞ

枝ふ同ゝ草木の幹より出る細き處をいふ 万十五 青柳の延太きりあろゝもぐまき

ゆゝゝく君ふ戀わたるこのも 和 記中 引闕其枝 和 肢和名衣太 類名 朕又肢

えぞごのき

白栁ふいふ 嘉禎三年大饗次第 居菓子蘇甘栗、枝柿○又俗ふ柿實の枝ゝ折るをもいふ

えぞずゝ 俗

躑躅の小枝を焚成て上ふ石灰を抹れる炭あり茶家ふ用ゆ樂炭の上に加へ置き爐火を熾す

媒ゝゝる者あり

えぞち

えぞの體言 記下 今科課役 万十六 檀越やあこのもあひそてこらわゝの課役はこらゝばるれもあり

らかん

えぞろ 夕チヌヌ

百姓の差役ふ充らるゝを云 記中 爲役之堤池而作百濟池

えぞつる テツツルツヽ

人ふ課役を充る戯いふ 記下 役秦人作茨田堤及茨田三宅

えぞまめ

大豆の枝莖を連移て接たるをいふ 如煮て其莢中の豆戯食ふ

えぞゝち 俗

岐ある路をいふ

えぞる 俗

匣の中ふ納れて人ふ贈る酒樽をいふ

えづき 音 よろこぶをいふ 慶節 悦喜

えづさい 雀鷄の雄ふて大頭鳥の如く小鳥を捉る者をいふ 和 雀賊 漢語抄云和名悦哉

えつり 屋上の瓦及板を承る呀をいふ小竹を以て椽の間ふ排べ縄を以て之を纏へるものあり茅屋あるとゝ今も用ゐる者あり 顕宗紀 取置蘆葦 蘆葦此云哀都利 和 桟 瓦乃衣都利 釋紀十三 蘆葦 順和名抄云々然則以蘆葦為桟也

えて 俗 得手の字を用ゐ來れり其事ふ巧あるをいふ又轉じて事の屢あるを エテアル エテスル あるい

ふ又 エテカッテ あるど意ふ任せて私をするをもいふ

えと 十干をいふ甲丙戊庚壬を兄とゝ乙丁己辛癸を弟とゝ併せて干とゝいふ又轉じて八干支を併せて干とゝいふ

えどあしのぎ 南部 俗 草名、蘇ふ同じ

えとうひゝくひ 俗 鳥名、鴻の一種眼上ふ淡白條ありて觜脚黒き者をいふ

えどごのゝゝ 俗 菜名、白芥ふ同じ

えどぎく 俗 草名、えぞぎくふ同じ

えどこんがらう 周防 俗 草名、佛甲草の雄種をいふ

えどきてげ 播磨 俗 豆名、菜豆ふ同じ

えどぜこ 南部 俗 虫名、馬蜩ふ同じ

えどとうぐるん 伊賀 俗 冬瓜の形長くゝて三尺餘ふ及ぶものをいふ

えどふらう 俗 豆名、菜豆ふ同じ

えどゝあ 俗 木名、二色桃ふ同じ

えな 胎中の小兒を包みある物を指いふ 神代紀上 先以淡路洲為胞 醫心 治胞衣不出方第十四 簾中舊記 公方さま御えなを御つき候 慶節 胞衣

えをけ

とに 産所記 胎衣桶ハ曲輪あり
高さ八寸程口の廣さ七寸ほど

胞衣を納て土ゑ埋むる桶まて中世の禮あり
胡粉まて塗り雲母まて松竹鶴龜を畫くを常

えホ 音

緣の音あり 後撰 戀五 ふこのみどり染けん松の
えホ〜あくだうちき袖ホも浪もよせてん

えホ〜ぐ 俗

灌木名枝細く〜て葉圓く深緑色其葉迎春ゑ似
て互生に春末黄花を開く百脉根ホ似て大あり

○又草名播磨の俗きぐのををいふ

えのあぶら

荏子の油をいふ 七十一番職人哥合 繪張詞書 えの油
ぐたらぬげあ

えのきぐけ 俗

菌名あめすゝきホ同ド

えのこぐせり 俗

胡椒をいふ

えばる 俗

揮霍〜て豪氣を示に をいふ

えひ

魚名形扁薄ホ〜て圓く周邊ホ鰭あり首蟾
蜍ホ似て眼大ホ其口頷下ホあり尾細長く〜て
尖り尾本ホ一刺ありて人ゑ螫に種類多〜あく えひを最とに背淡黑黄赤色腹
白く中ホ紅斑相對ぜる者あり其他異品名其音の下ホ載ま 和 鱣魚 和名衣比 大草家
料理書 鱣の汁ゑ柚の葉ゑまぜて〜もて
候て水まて洗て

えび

鰕類の総稱ホて一種ゑきに然れども多く海蝦
ゑ指て云へま 本和 和名衣比 和 鰕 和名衣比俗用海老二字 宇 後陰

雪をわけてあ〜てハえびのゆりホてはゆ〜まくるをこるホ○草名蕣蕣をい
ふ今も上総まて云のいふ

えび 音

香名あり未ご其物を詳ホせに漢土ホ裏衣香
といへるを今の白囊まて諸香を合せてる者あり

混ぜぐ〜ぐ 宇 上藏閣 ぎうう多くく〜ぐあはめて えび丁子のあらざをふいれて
つのせたまひ 和 裏香 俗云衣比 源 末摘 えびのこのあらざ〜くらをりて 花鳥餘情 四 香字

抄云採梅檀樹葉皮春節爲香
故云葉皮

えびい〜 日向 俗

蝦魁の化石あり○石蝦

えびいぢら 俗

蔓艸名 葉ホ同ド

えびのづら

蔓艸あり葉葡萄ホ似て小く厚〜又種々變
葉あり共ホ面深緑ホ〜て背ホ白毛或ち褐

毛あり夏月葉間ふ穂伐出〜緑圓實を結ぶ南天より小あり熟すれば黒く味酸〜○蘡薁 記上 乃生蒲子 本和 紫葛 和名衣比加都良 ○葡萄をもいふ 和 葡萄云々 漢語 朴云葡萄衣比加豆良乃美 ○又髭伐もいふ 源 初音 御ぐ〜 ふども云々

えびが糸 薩摩 俗

蝦属名、蝦魁ふ同じ

えびぐき 俗

草名拳參ふ同じ

えびざこ 俗

小蝦中ふ小魚の淆まるあるをいふ

えびに

蝦夷の轉ありそれよりいで〜京ま遠き邊裔及外國をいふ又轉じて外冠をもいふ 景行紀 至三 蝦夷境 靈異下 蝦夷類 衣比 盛衰 三十四 遠國のえびにといへどもあさけを志る禮義を辨るぞ〜 唐物語 此時まえびにの王ありそるものまゐりて申さく三千人まさふらひあひ給へる女御后いづれまでも一人給らんと申ま 徒然草上 えびにゐ弓ひくにべき〜ず 類名 冠 ○又俗閒ま商神をもいふ風折えぼ〜 狩衣指貫を着て棘鬣魚伐釣上さる像を居きこれを祭る 盛衰記九 彼岳ふ乗て夷三郎殿と申神を奉祝岩殿と名附ま望あどある神あるべ〜

えびにぐさ

草名苗の高さ二三尺葉排生〜て莖ふ互生に蚕豆葉の如くふ〜て薄小ふり夏葉閒ふ花を開く筒辨五つふ分れて梅花の如く深黄色花蕊ま〜て觚伐結ぶ其子一頭尖り斜ふそぎ〜るごの如〜 ○馬蹄決明 本和 決明 和名衣比須久佐 ○又草名地榆をもいふ 醫心二 地榆 衣比須久佐

えびにぐさもま

草名春月紅芽を生じて叢生まて葉三枝九葉春末莖梢一花を開く牡丹ふ似てふあり花形數品あり常品ハ碎辨ありて花心を見たきびに上品の者ま黄心伐露に花色紅白淡紅等種類多〜 本和 芍藥 和名衣比須久須利 一名奴美久須利

えびにま糸

草名地榆ふ同じ 本和 地榆 和名阿也女多年 一名衣比須久須利

えびにぬか 俗

魚名、鯽魚の一種まぶふの形ふ〜て肩ふ節ありて首至て小ある者をいふ

えびにむし〜 大和 俗

虫名石蚕の一種ありだいこくむ〜の下供せ見べし

えびにめ

海菜名東北海ま産に大あるま横幅尺餘長さ數丈淡黄ふ〜て両邊青黒色柔韌ふ〜て韋の如〜 ○昆布 本和 昆布 和名比呂女 名衣比須女

えびぞめ

紫色の淺き伐いふ 衣服令 九服色云々蒲萄 蒲萄者紫色之最淺者也 縫殿寮式 蒲萄綾一匹紫草酢一合灰四斗

宇藏開上 えびぞめの綺の直衣きて 源藤末葉 あをき所のきちゝつるばそはらえびぞめあど○又轉じて織物の名とし 桃花蕊葉 蒲萄染 經赤緯紫 藻塩十八 ぶどういろ えびぞめわもて紅ぬきそれ紫○又重の色目もいふ 胡曹抄 蒲萄染 表蘇芳 裏花田

えびぞろ 俗 襲萼ふ同じ

えびづる 俗 前條ふ同じ○加賀ゆて草名紫葛戈いふ

えびづるのむし 俗 襲萼の莖節間ふ生ずる蟲虫あり小児疳疾の藥ふ用る

えびどり 駿河 俗 鳥名、魚狗ふ同じ

えびね 俗 草名、形狀白及ふ似て濶短夏初莖を抽き十數花を着、亦白及ふ似さり花褐色淡黄白等あり

えびのりま 日向 俗 虫名、水黽ふ同じ

えびのき 山城貴舟 俗 木名、合歓ふ同じ

えびのこ 近江 俗 水中生物名紫梢花ふ同じ

えびのに 紀伊 俗 藻名聚藻ふ同じ

えびのをバ 紀伊 俗 鰕屬名びちやもんえびふ同じ

えびら 箭を盛て背ふ負ふ器ゆて胡籙ふ同じ然れども中古以後ハ一種平胡籙ふ似さる者をさしてえびらといふ逆頰箙角箙柳箙等の目あり

へてだきしたりそる云々平家のきんだちも花えびらとそいりありやさしと口々ふぞ感じ給そる 七十一番職人哥合 人心りけをりけをゝきれそて腰はあれさる古えびら哉○又蠶を入て繭を作らしむる器をいふ 和 蠶簿 和名抄 比良 夫九 山里ハはゝのえびらふすむ月のあげふもまゆのきみもとえそり

えびを 俗 金魚の一種其尾蝦ふ似さる者をいふ○金魚魚

えふ 俗 葉の音ふて一ひら二ゑ〳〵るる物をいふ花瓣のえふ多〳〵あゞといふ

えぶ 音 厭舞ふ同じ 塵袋 されバ邪鬼を降伏し災殃をけはきがさふる故ふ最初ふ是をあひえぶの亂聲とそ三度泪あをふる

えぶりき 北海道 俗
落葉松ふ生ずる硬木耳あり質輕く黄白色其味苦烈ふ〜て腹痛積痛を治す北海道ふ産ず○落葉松ふ同ど

葉松寄生
鳥名、さんりのごゑふ同ど

えびら 俗
えびふ同ど〜烏帽子の音轉ま〜て古來えの音ふ稱す 和 烏帽云々 烏帽子俗訛烏爲 或通見文選注玉篇等 今按烏爲

えびら〜 音
太平十三 次ふ走り下部八人細えびら〜ふ上下一色家の紋の水干着て

えびら〜のけ
烏帽子ゟ取て掛置處の釘ふり 盛衰四 大床の柱ふえびら〜のけふつ〜ぬきて
鳥名、さんりのごゑふ同ど

えびさぎ 俗
帽ふり冠袍ふらぎる時及身賤の者の禮冠ふり然れども位階ふ因て形及漆ふ差別あり名目各條ふ

えび〜
舉ぐ 字拾十二 頭ふふくろのえび〜を引入て 續世継八 りさあて〜あて〜えび〜とぐめりりぶりとぐめあどせぬ人ふ〜

えび〜りを 俗
魚名、鯛鰹魚ふ同ど

えび〜あや
男子加冠の時名ゟ命くる人をいふ

えび〜ぎき 南部 俗
果名、鹿心栎ふ同ど

えび〜ごひ 俗
介名、玉珧ふ同ど〜○又介名、伊勢の俗り石蜐をいふ○又介名、蚌の一種ふ〜て水田溝渠中ふ産ど
て形小ふる者をもいふ〜ぎ〜ひの下併せ見ど〜

えび〜ぎく 石見 俗
草名、烏頭ふ同ど

えび〜ぐさ 東京 俗
草名、百脉根ふ同ど

えび〜ばあ 加賀 俗
草名、烏頭ふ同ど

えび〜をり
烏帽子を作る工をいふ 七十一番職人哥合 えば〜をり 謡曲烏帽子折 此わるをふえび〜折ハ侯もぬ〜
草名、蒲萄ふ同ど 鑿心二 蒲陶 和名衣比

えを
えん 音
縁の音ふて家の母屋ふ〜ざる所をいふ邊裔の義あり 平家長門本十七 このげときハ北よりの第二けんの

えんふ居さ[illegible]○又因縁の縁をいふ 歸命本願抄中 常ふ
流轉して出離のえんあるあとあ〜〜

えん 音
宴の音ふて遊宴をいふ 後撰春下 寛平の御時さくらの花の宴ありけるふ 源野分 御前のつぼ前栽の
えんもとまりぬらん〜〜

えむ 音
艶の字音あでめきてるをいひ又優美あるをもいふ 宇藏開上 大將のあ〜〜いづくよりぞゐいとえんある
ふさくふ 源宿木 えんふそぐろさむく花の露をふてあそびて 源若菜下 笛の音ふども
えんふすとこのぼりはてあん

えんあんのぎ 音
宴座穩座を併せ云へるふり 名目抄 宴穩座 江次五
無宴穩座則於此所見見恭
ゝいもとふ同じく饗應の時相伴の人の座をいふ
花鳥世 ひき〜〜の座中少將ハ奥の方ふつき親王公卿
ハ端ふつく是戔垣下の座といふ中少將を饗應をる請伴の心ふり
北山ハ 還饗大將先着垣下座上設菅圓座

えんがく 音
輔前此板ふて造りてる所

えんごのハ 俗
縁起の音ふて神社又佛寺ふどの起れる故戔いふ
又靈驗をいふ轉じて其事戔記〜〜る書をも

えんぎ 音
いふ 類聚符宣抄 此宮從世初之時已爲日本之固其奇異縁起不可勝計 熱田縁起
但件神社舊依無縁起云々粗加繕寫有修縁起
祝をいふ又祥をもいふ エンギニ 云々ものる又 エンギガヨイ
婚姻をいふ

えんぎ 俗
艶あるけ〜きをいふ 源雅本 いまやうのわらうど
ごろのやうふえむげをもてあそぐ

えんぐこ 俗

えむげ 音
水草名其葉萍蓬の如くふ〜〜圓く花莖長く延て
其先黄花を開く亦萍蓬ふ似て小ふり盆栽〜〜

えんこりさこり 俗
て高く吊れぞ其花の莖下ふ垂て猿猴の手の如き戔以て此名ふり
○又常陸筑波まそハぼぎこらん戔いふ

えんこりのまくら 伊豫 俗
介名さるのまくらふ同じ

えんこく 音
時刻の延さるをいふ

えんじ 音
べふをいふ 下學 經粉又云臙脂○又綿胭脂ふ同〜〜○
又俗ふ紫色と赤色を混さる画料をもいふ

えんぎあや 音
縁ある人の義ふて婚姻ふどの縁あるをいふ
園大晉十三 故玄忠法印直弟禪侶爲補木縁者

甲陽軍鑑末書十 緣者戔變改し其外度々の表裏致されしゆゑ

えんぎやう 音

火災をいふ 盛衰九 今年三月廿四日信濃國善光寺炎上あり

えんぎよ 音

艶書の音ふて男女の情書をいふ○又えんぎと唱ふ 金葉戀上 堀河院御時の艶書合ふ 詞花懸露集 それ艶書のきやうりうでやりもふくあらくくもらくとあるもしろくさめきたるがよきあり 又 堀川のゝうどの御時えんぎ合ふどの侍りし

えんすゐ 音

淵醉の音ふり五節又も臨時の大禮の後ふ藏人頭以下の諸臣を殿上ふ召て管絃屬文盃酌の事あるをいふ 建武年中行事 殿上の淵醉あり藏人頭以下ことゝふたへくるをのちだいぎんふつく

えむせう 音

焔硝の音ふり即硝石をいふ古來加賀越中讃岐の産を最とし筑前豊後美作飛驒安藝伊勢の産ふれふ亞ぐ 慶節 塩消

えむそ 音

塩酢酒醬等をも兼いへり 慶節 塩酢

えんだら

筵戔數て往來の道とまるをいふ 枕 れいのえんだらあきそおるゝに 建武年中行事 えんだらふたんをあきて屏風の下ふいてる

えむだつ タヘツヲ えむ 音

艶めく戔いふ 源氏顔 えんぐちけしきばまん人をきえもいりぬべきまもるの樣あめりし

えん祢んさゝり

王孫の一種ふして大ふり葉圓尖ふして細長ふらび三葉ぶゝふ莖端ふ並び着て傘狀をふに中心莖を出し花を開く三瓣ふして紫色或緑或白粉紅等あり

草名えれさゝりに同じ

えん祢んさゝり 俗

宴座の音ふて賜宴の座席をいふ 北山抄 即撤宴座數穩坐 江次五 宴座官廳之儀又西廳也上卿東面參議西面

えんのざ

塩梅の音食物の味をいふ 慶節 塩梅

えむばい 音

冠の纓をいふ古製も燕の尾ふ似たる故此名あり 和 纓俗云燕尾

えんび 音

闍浮提の異名ふり勝金と譯せ即南贍部洲ふて此土をいふ 盛衰廿四 日本第一の伽藍也えんぶ無双

の大堂あれど 著聞二 閻浮提之内三千世界之間可ₗ有二一可ₗ無ₗ双

えむぶ 音

厭舞の音なり舞楽の初、乱聲を奏し左右伶人拌を執て舞ふをいふ 中務式 然後奏二厭舞一訖 儀式八 左司先奏二厭舞一次右司訖立合各二人 文永御八講紀 厭舞の後賀殿地久を奏に

えむぶごごん えむぶご 梵 ごん 音

閻浮洲の金の義なり佛書に其金の佳品なる事をいふ故に佛家動もすれバ此名を唱ふ大智度論三十五翻譯名義集三等其事殊詳にせり 平家二 月盖長者がちせいによつてまうぐり城よりまうえむぶごごんを取て

えむぼうし

烏帽子なり今えぼしといふ 真本字鏡巻十 塩帽 架 江年保字 志 類名 烏帽エンマウ一名頭衣 とあれど假字ハえを用ゐるべし ゑぼしハゑぼうし○字鏡に帽を増に誤れり今改て引く

えむま 梵

佛家にいふ自在冥界の王をいふ此に静息と譯に 著聞二 えむま王宮より此御ほうひせらけぶと候とて 灵异下 忽然死而至二琰广ノ國一時王校二之不ₗ合二死期一

えんめい 音

延命の音なり長命をいふ 字春日諸 えんめいそくさいをむねとして

えんめいさうり 俗

草名ひきおこしと同じ○播磨の俗ぼるはまべをいふ

えんめいぶくろ 俗

俗間に傳へていふ寳の名なり嚢腹脹れて口邊戕括まりたる嚢をゑびのそを

えむら 梵

えんまに同じ 灵异中 時有二閻羅王使二人來召二光師一

えむり 音

いとひ離るゝ意なり 徒然艸上 六塵の樂欲多しといへども皆厭離しつべし

えんれいさうり 俗

草名えれさうに同じ

えめむし

虫名蚰蜒に同じ 字 蝘蜒

えもぎ

草名艾に同じ 慶節 蓬

えもん 音

衣紋の音にて衣服制度着用等の法をいふ 續世継八 此大將殿をことの外にえもんをぞ好ミ給てうへのきぬの長さ短さなどの程など細かにこしらへめ給ひて

えやみ

瘟疫などの天行病をいふ 記中 役病多起テ人民死為盡 和 疫 衣夜美 ○又瘧疾をもいふ 和 瘧 俗云衣夜美 字

痰 老虐也 衣也三

えやそぐさ

草名、葉竹葉の如く両對に圓莖高一三尺九月莖梢葉間ごとに三五花を開く筒瓣ふ〜て末五つに分る畫展び夜收る其色青碧ふ〜て斑點あり又白花の者あり種類多〜 本和龍膽 和名衣也美久佐 一名尓加奈

えよがろ

役ふ立る丁をいふ 仁德紀 差白鳥陵守充役丁

えらび

擇の體言あり 祝詞式大殿祭 同殿 能裏 塞坐 參入 罷出人能選比所知志 源箒木 君ごちのかみふき御文

らびふゝまゝていうだこの里の人うハたぐひ給ハむ

えらぶ ベビブベ

多くの中より拔出にをいふ 神代紀下 是後高皇産靈尊更會諸神選當遣於葦原中國者 古今序

〻く此ごびあつめえらばれて 順集 天曆五年

宣旨ありて初てやまと歌えらぶ

えり

衣の領をいふ 慶節 襟衿袵〇又俗ふ轉じて頸をいふ

えりあゝろい 俗

定粉をいふ 女子頸ゟ白粉の濃〻〻ん爲り傳る白粉あり

えりくび

選むれ殘りとる殘いふよゝ〻ぬ意あり 宇槻の上 ゝふそのをりの えりくびとぞあらんふとのたまふ

頸をいふ

えりまき 俗

頸ふ纏ひて寒殘防ぐ具あり絹帛ふて製に近來ゟ絨又ハ獸皮まて造る

えるラリルレロ

えらぶふ同じ 源箒木 中の品のけ〻うハあ〻ぬ

えり出づべきころはひあり 榮ものく藤壺 よきを

えり給へり

えれさう 音

草名、又えんれいさう、えんねんさう、深山の陰地ふ生じ、一根一莖、高さ一尺許、莖上ふ三葉相對〻一葉の瓣ふり紫、白淡緑あり、又白ふ〻て一梗を抽くこと一三寸清明前後頃ふ一花を着く三細子多〻根ハ塊樣をふ〻て甚苦〻藥用とす

狀心臓樣ふ〻て端尖り中心ふ一梗

定價金十錢九厘

明治十七年七月二十二日出板板權所有屆

文部省編輯局藏板

明治十四年五月

語彙 宇之部

文部省編輯局